

A4) 5FU, ロイコボリン, MMC, CDDP の
肝動注療法が著効した胃癌多発肝転移の
1例

小林 功・横森 忠紘
家里 裕・大矢 敏裕 (小千谷総合病院)
吉田 崇・清水 公裕 (外科)

【目的】胃癌の多発肝転移に対して 5FU を先行持続投与し、生体日リズムを考慮したロイコボリン, MMC, CDDP の時間投薬による肝動注療法が著効した症例を経験したので報告する。

【症例】64才男性。平成8年3月多発肝転移を伴う胃癌 (AM, Borr. 3) で、胃全摘、肝動注カテーテル留置を施行。術後2日目より 0.5 ml/h の infuser bag を用いて 5FU, 500 mg/day を5日間持続動注。ロイコボリン 21 mg を pm 4時, 5日間静注。化療開始5日目 am 9時に MMC, 2mg 動注, pm 4時に CDDP, 40 mg 動注した。これを1クールとし, 2週毎に6クール施行した。

【結果】化療に伴う副作用は全く認めなかった。5クール施行後の腹部 CT で肝転移巣の著明な縮小を認めた。

A5) 転移性肝癌 (AFP 産性胃癌) に対する
治療成績の検討

太田 宏信・黒田 兼
鈴木 恒治・石川 直樹 (済生会新潟第二)
吉田 俊明・上村 朝輝 (病院消化器科)
川原聖佳子・石崎 悦郎
相場 哲朗・川口 正樹 (同 外科)
武田 敬子 (同 放射線科)
石原 法子 (同 病理)

AFP 産性胃癌は高率に肝臓に転移し予後不良とされている。今回われわれは6例の肝転移をきたした AFP 産性胃癌症例に対し種々化学療法を施行した。6例全例男性で平均年齢 60.8 歳。6例中2例は原発巣 (胃) を切除したが4例は切除不能であった。6例中3例には肝動脈塞栓術 (TAE) を施行し, うち2例に縮小がみられた。2例に対してはリザーバー動注療法を施行し1例に縮小がみられ, 11カ月生存した。1例に全身化学療法 (CDDP+5-FU) を行い, 原発巣, 肝転移巣とも縮小し現在外来通院中である。AFP 産性胃癌の肝転移巣は血流が豊富な為か TAE が有効であり, また抗癌剤に対しても比較的感受性があり, 積極的な治療により予後の改善が得られるものと思われた。

A6) PBSCT にて超大量化学療法を施行した
直腸肛門部悪性黒色腫の1例

山本 哲久・宮下 薫
鈴木 茂・永島 伸夫 (燕労災病院外科)
大黒 善彌
森山 美昭 (同 内科)

直腸肛門部悪性黒色腫はまれな疾患であり, 有効な治療法がなく予後不良である。今回, われわれは再発例に対し PBSCT を利用した超大量化学療法を行ったので報告する。

症例は59歳男性。平成7年11月, 直腸下部低分化型腺癌と診断され腹会陰式直腸切断術を施行した。術後, 悪性黒色腫と判明し DAV 療法を主体とする免疫化学療法を施行するも, 3カ月後に眼窩・肺・骨盤内・皮膚・リンパ節に再発を認めた。平成8年3月, まず末梢血幹細胞動員のために CPA 5g を投与し採取した。汎血球減少等, 重篤な副作用を認めたが骨盤内を除き PR が得られた。全身状態の改善を持ち, 5月に CPA 3g・CDDP 100 mg を3日間連続投与し, PBSCT を施行。1週間前後より汎血球減少等 Grade 3 以上の副作用が出現し, 対症的に治療をしていた。しかし, 最終的に多臓器不全を併発し死亡。本療法は1つの方法とも考えられるので本症例の経過につき報告する。

A7) 進行胃癌に対する Neoadjuvant chemotherapy (NAC)

山本 智・梨本 篤
牧野 春彦・土屋 嘉昭
筒井 光広・田中 乙雄 (県立がんセンター)
佐野 宗明・佐々木壽英 (新潟病院外科)
本間 慶一 (同 病理)

原則として根治切除不能な進行胃癌を対象に NAC として13例に FLP 療法を行った。非治療因子の内訳は, 肝転移1例, 腹膜播種7例, 傍大動脈リンパ節転移9例で切除率は, 84.3%であった。CR はなかったが奏効率は54%で, 肉眼型別・組織型別の奏効率に差は認めなかった。部位別では, 傍大動脈リンパ節転移に対して66.7%と最も高い奏効率が得られた。予後は, 1生率40.1%で50%生存期間334日であった。PR の7症例では, 1生率50%で50%生存期間334日であったのに対して他6症例では, それぞれ26.7%・217日と低かったが有意差は認めなかった。今回の検討では, 重篤な副作用を認めることなく奏効率は54%と高率であり, FLP 療法が NAC として有効である可能性が示唆された。しかし, 予後の延長には至っておらず, 今後の検討課題と思われた。